

【資料】

資料：家族療法のエッセンスをどう考えるか ——家族療法全国実態調査結果より（資料第2報）——

清水新二* 高梨 薫** 鈴木浩二***

1. 自由回答の資料的価値

われわれは1991年初頭、全国の日本家族研究・家族療法学会員を対象に『家族療法に関する全国実態調査』を実施し、その結果を『家族療法研究』誌上に第1報（鈴木他、1991）ならびに第2報（鈴木他、1992）として報告した。またこれと平行して、本誌前号において調査結果の概要を説明すると共に、調査の単純集計結果を中心に「資料」という形で報告をした（清水他、1991）。本論では引き続きこの全国調査の結果について、特に家族療法のエッセンスについて、回答者たちがどのように考えているかを資料的に紹介してみたい。

第1報でも述べたように、今回の調査における回答者の教育的、職業的バックグラウンドは大変幅広いものであり、そこでさしあたっての家族療法の定義も次のような間口の広い形にしておく必要があった。すなわち、『家族療法とは、その形式や技法のいかんにかかわらず、家族の個々の成員よりも家族というシステムに焦点をあわせた介入方法（働きかけないしは援助法）の総称である』という広義の定義を与えたわけである。しかし調査上のそうした便宜的な定義とは別に、家族療法

とのそれぞれの関わりの中で回答者が家族療法のエッセンスたるものを感じるか否かは大変興味あるところである。というのも、家族療法が日本で展開し始めて以来少なからぬ時間が過ぎ、専門家の間でも自らの体験を通じたそれぞれの家族療法観が形成され始めているからである。さらに、わが国における家族療法の第一線を支え、活躍している専門家が家族療法をどう捉えているかは、家族療法学会の組織的観点からしても現況の理解と今後の展望にとって有益であるばかりでなく、家族療法に関心を持つわれわれ一人一人の家族療法理解にとっても示唆に富むところとなろう。

筆者らは本資料を、家族療法に関して日本の専門家がどのように考えているのかを探る上で、その情報源泉として、現時点では一級の資料と考えている。実際今回の調査結果を整理しながら強く感じさせられたことの一つが、この家族療法のエッセンスに関する自由回答欄に記された、さまざまな意見が読み手に与えてくれる豊かなイメージーションであった。家族療法の体験がなにほどにかあればあるほど、ここに収められた多様な自由回答は各人の家族療法に関するイメージーションをそれだけ豊かに触発してくれるであろうし、綴り手と読み手の出会い方によっては家族療法に関する洞察と自省をさらに深めてくれるかも知れない。あるいはまた、家族療法に関心を抱きながらもなお実践体験を持たない読者には、それなりのイメージを形成してくれるだろう。このような文脈において、家族療法に関するエッセンスを直截に問うた結果を「資料」として、つまりできるだけ生のデータとしてまとめ、読者の閲覧に供することは貴重な試みであると確信するものである。

What is the Essentials of Family Therapy?
Reflecting of Experts' Opinions

*国立精神・神経センター精神保健研究所 精神保健計画部

Shinji Shimizu: National Institute of Mental Health, NCNP

**東京都老人総合研究所 保健社会学研究室

Kaoru Takanashi: Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology

***国際心理教育研究所

Kouji Suzuki: International Institution of Psycho-education

結果を紹介する前に、調査の方法について簡単に繰り返しておこう。調査法は郵送法による自記式悉皆調査とし、質問票発送対象を1990. 12. 31. 現在における日本家族研究・家族療法学会員全員の681名とした。但しこの時点で海外に在住する会員14名は除いた結果、実際の調査票発送数は667であった。約1ヶ月の回収期間をおいて寄せられた有効回答数は333で、これを配布数で除した回答率は49.9%であった。この回答率の性質ならびにサンプルの偏りについては既報（鈴木他, 1991）に触れておいたが、おそらく今回の自由回答に関しては、既報で触れた調査結果全般のサンプル偏向以上に、家族療法経験者を中心とする回答とみてよいだろう。

一方、「家族療法の定義にはなかなか難しいものがありますが、家族療法のエッセンスは、あなたにとってどのようなものだと感じていますか」との問には、333人の回答者中231人が答えてくれた。設問の通り自由に記載するにはなかなか難しい質問であったことを考えれば、サンプルの偏り問題を別にして、この数字は決して低いものではないだろう。

2. 自由回答にみられるいくつかの特徴

寄せられた回答を全般的に眺めてみると、エッセンスに関する記述内容は、大きくは三つに分かれる。1) 認識論的転換に触れるもの、2) システム変化という家族療法の核心を指摘しようとするもの、3) ある種の特徴を具有する問題解決法として記述するもの、である。もちろん同一の回答者が1)と2)を同時に、あるいは2)と3)を同時に記載している場合も少なくなく、1人の回答者がこの1)から3)のカテゴリーに丸ごとスッポリ収まるというわけではない。また、そもそもこの三つの分類自体が恣意的であるとも言えるだろうし、またこの分類には収まりきらず、4)「その他」として扱わざるをえなかった個性的でユニークな意見もある。以下に紹介するほんの一部の典型例としての意見は、こうした特徴を念頭に置いて読まれるべき性質のものであることは言うまでもないだろう。

1) 認識論的転換

「物の見方、考え方の転換である」(ケース170, 以下同様の表記法)

「認識論的転換をもって“治療”というものを科学の眼で真摯にみつめ臨床対峙する一つの治療哲学」(ケース048)

「システム理論に基づくものであり、認識論の転換である、従って従来の個人療法的治療観を更に広げ、治療の新たな可能性を示した。……」(ケース186)

この三つの典型的意見には認識論的転換についての明確な言及がなされている。しかし、「発想の転換。円環的な家族関係の理解が魅力的です」というケース310などのように、そこまで用語上の厳格さを問わねば、同様あるいは類似の意見が相当数みられた。それらのほとんどに通底するキーワードは、ケース186も使用している“システム”あるいは“システム論”である。たとえば、その例としてケース199を挙げることができよう。

「個人をシステムの中での関係としてとらえるもので、人間を生物的次元より、より社会的次元でみている進んだ治療法。『家族』だけでなく、さまざまのシステムに人間はあるので、この療法はいろんな分野に応用できると思う。システム療法といった方がいいのではないか」(ケース199)

もちろん用語としてシステムないしはシステム理論への言及があるといつても、今回の調査ではその中身まではわからない。用語の一人歩きや専門家のジャルゴンになっているだけのこととも論議できようが、その余地は否定しないまでも、イメージとして広く共有されているのがこのシステム概念にまつわるものである。さらにケース199ではシステムへの言及にとどまらず、一度システム的認識転換をすれば、それは家族療法に限らずもっと一般性の高い療法になるとの可能性に触れ、これを「システム療法」として捉える提案に至っている点が興味深い。これと関連し、逆にケース170はとりたてシステムには触れずに認識論的転換に言及しているが、家族療法を通じた「物の見方、考え方の転換」はシステム的認識にさえ收まりきるものではないことが示唆されているのかもしれない。

2) システム変化

「IPだけを取り上げずに、家族全体をみれば、他の社会的な意味の上位システムも理解して可能な部分での変化を促すやり方である……」(ケース194)

「①メタポジションから人と人、人と制度の関係の全体を把握すること。そして、関係をかえることを通して（介して）個人のありようを変えててしまうこと。②家族自身の力を利用して家族を変化させる技」(ケース239)

家族療法はシステム論的認識に基づきつつも、単なる認識論的転換にとどまらず治療・援助活動にとって具体的にどの辺りに照準を合わせればよいかを指示するものといえよう。言うまでもなくその照準点はシステム変化であるわけだが、ケース194と239はその一例に過ぎない。期待する変化の態様や速度、変化だけにとらわれない広角的な目配りの必要性、変化の逆説的意味合いなど、それぞれに注釈が付記されるものの、システム変化一般について、あるいは家族システムの変化やエコ・システムの変化に触れる記述は相当数にのぼった。

ただシステムを変化させることはあっても、ケース239も触れているように、それは家族自身の力や可能性に依っているのだという側面は見落とされではならない点であろう。というのも、第1報では家族療法に対する意見を求められ、34.5%の回答者が「操作的すぎる」と評価している結果が報告されたが、システム変化の問題は家族療法に絡みつくこの操作性イメージに少なからず関連しているからである。こうした文脈における家族システムの変化については、ケース239以外にも、例えば次のケース100、234などのコメント内容が多くみられた。

「家族自身がもっている内在的問題解決力を引き出し、問題を克服していく力が育つよう援助するものである」(ケース100)

「家族システムにゆさぶりかけて問題解決のための新たな糸口を家族と一緒に見つけること。後は家族の治癒力を信じて家族自身の力で動き出すのを見守る」(ケース234)

仮に操作性のイメージを承認した場合でも、操

作的であるかも知れない療法の結果、影響を受けるのは家族システムだけでもなく、この点では治療者・援助者自身もまた同様であることを示唆するコメントも寄せられた。

「……IPを個人としてだけ見るだけでなく、関係（家族・社会）の中で理解出来るようになった。個人療法より心労少なく、時には楽しく、終了後余り疲れないですっきりする。尚、終了後のスタッフ間の協議は甚だ有意義である」(ケース011)

「……家族療法では誰が悪いわけではなくそのやり方、行動の相互関係に問題があるという考え方は治療者にとって気が楽な有用な方法であると思う」(ケース052)

このように、当の家族システムのみならず、家族と治療者からなる治療システム自体も、まわり回って「操作」「介入」の影響を受けることが窺われ、操作性の問題も循環論的視点から眺めるといま少し違ったイメージや論議が膨らんでくるように思われた。

3) 問題解決法

あえて認識論的なものとの見方をせず、「道具、技法に過ぎない」(ケース132)と言明したり、「変化の技法」(ケース245)と家族療法のエッセンスをいい切る回答もあったが、“問題解決法”と筆者らが分類した回答の中では、「危機介入」「技法」「療法」といった用語の使用が目的だった。その多様さゆえに例示は割愛するが、流派的な技法の記述はもちろんのこと、それぞれにユニークで経験的な技法の記述も含めて、家族療法を問題解決の技法として位置づけている回答者が多いのも今回の調査結果の特徴であった。このことは、後述の自由記載一覧リストを見れば、一目瞭然である。

そうした中でも、少数ながら技法として家族療法を理解することへの心得に触れる回答もあったが(ケース181, 026), それらは一転して先のケース132, 245の指摘とどこかで相通じるものがあるように思われたことが興味深かった。

「家族クライシス介入を考えている。あとは技術的にならないことだと思っている。」
(ケース181)

「有効性の限界を常に意識していること」

(ケース026)

こうして整理してみると、次のとく家族療法それ自体のエッセンスというより治療・援助活動全般に関するエッセンスとみられる記述（ケース224, 191）や大変広く柔軟な考え方（ケース217）もあるが、結局最大公約数的意見は、簡にして要を得たようなケース196の意見であろう。

「人間（人類）が人間らしく、充実した生活をしていくための援助」（ケース224）

「家族成員が相手の意図をお互いに察することが再びできるようになること。もの言わぬ関係の成立」（ケース191）

「問題を持つそれぞれの家族が家族間の関係のゆがみの修復を望む時、手を貸し、その家族に応じた方法で、助けて行く療法」（ケース217）

「システム論的な考え方をベースにある問題をとりまくシステム（外部環境との相互交流をもつ構造）を変化させることにより、問題解決を計る援助技法」（ケース196）

またこうした技法とみる立場に対して、疑問を呈する意見も寄せられている。たとえば、「技法でなくケース概念化のひとつのやり方」（ケース283）という意見には、具体的な技法というより、ケース理解にあたってのフレームを与えてくれるという形で、むしろ家族療法家を支えてくれるものといった示唆が示されている。あるいは、全く異なる観点から、「家族療法的アプローチをはじめた諸機関、医療機関内の組織上の混乱ばかりでなく、最近の学会員にも、その混乱が見てとれる。『一つの技法』と捉えているところに、その混乱の源があると思われる……」（ケース328）として、むしろ認識上の転換の重要性を強調してみせる意見もあった。

いずれにせよ、今回の調査結果からみた限り、多くの専門家によって考えられている家族療法のエッセンスは、1) システム論を認識論的基盤として、2) 治療・援助活動の目標ないしは焦点がシステム変化とその結果としての家族症状の軽快化や消失におかれ、3) こうした背景と文脈とのセットでなされる問題解決のための、具体的で多様な技法を適用する働きかけ、とでも要約できる

ように思われる。この「働きかけ」は、職業的立場やそれぞれの所信によって、治療とも援助活動ともまた介入とも言われることがある。しかし、いずれにしてもこの背景と文脈に即していえば、問題解決のためにシステムの逸脱増幅過程の導火線たる「最初のひと蹴り（initial kick）」（Marryama, 1963）としての働きかけである点では同一であり、先のシステム変化と家族の力の関連性もこうした視点から捉え直すことができれば理解はしやすい。さらに、その働きかけを少しでも有効的にするための工夫、努力として結晶化したものが、それぞれの流派やグループの技法と考えられる。

4) その他

自由回答欄の分析から、以上のような三つの要素を家族療法観を構成するエッセンスとして抽出したが、この分類とは別に、大変印象的な記述のいくつかを簡単に紹介しておこう。

「システムと愛」（ケース62）という端的かつメタポジショナルな指摘があるかと思えば、次のようなメタファー的記載も散見された。「フルコースの食事を味わう時のバックで流れている音楽のようなもの。音楽によって知らず知らずに食も進むし、どんなすばらしい料理であってもはしおつけたくなくなってしまうこともある」（ケース116）とか、「それぞの材料をうまくあわせて料理する料理人のようなもの。一流のコックは目指していないものの『煮込み料理はすごくおいしい』と思えるぐらいには目指したいと思っている」（ケース220）といったものである。一方、家族療法を適用する際の社会的、文化的階層性および選択性の問題に言及した傾聴すべき意見も寄せられている。「私の分裂病中心の臨床においてはあまり出番のないもののように思います。それはまず孤立者、欠損家庭、貧窮家庭が多いからだと思います。家族が意見を揃える余裕があり、またそれだけの時間的犠牲を払う気持ちになっている家族に対してはよいのだろうと想像しますが、この条件はかなり選別になります。おそらく強制的に呼び出せる家裁などの適用が現実的なのでしょう……」（ケース047）、「改善効果のあるもの……という症例選択はあるように思うが如何でしょうか。これ

は今までの試行錯誤の結果の印象ですが。」(ケース069), ならびに「だれでもが安易にできる技法ではないが、実力のあるスタッフと設備がとのつていて家族療法にあうようなケース（経済的にも時間的にも家族病理の点でも）が来れば非常に有効だと思う」(ケース162)などがこれにあたる。この点とも関連して家族療法への要望や疑問も提起されており、最後にそれらを紹介すれば次のような記述を例示できるだろう。

「IPの示す『問題』を『全体としての家族』の中で捉え家族力動を明らかにし、その力動を動かすことによって『問題』の軽減ないし、解決をはかろうとするもの。ただし、技術論的に偏りすぎるきらいがあり、個人病理の深い所までの解決がはかれるかどうかは疑問であり、表面にでている『問題』を操作的に扱うだけでどの程度の治療効果を上げられるかどうかは私としてはわからない。日本人の心性や特性に適した治療手段であるかどうか今後とも検討を加えて欲しい」(ケース129)

「日本の精神医療制度が、家族療法あるいは余裕のある医療体制にあるのかどうか認識してほしい。家族療法をシステム化したり、回数を決めたりといった関わり方には反対。治療目標をどこにおくのか、家族関係がそう簡単でたやすいものであるとは思えない」(ケース166)

「……日本における家族療法のエッセンスは、『家族の中で治す』ということであると思う。精神分析的治療観は家からの自立、独立、個別化が高く評価され、目標となり、それを目ざして治療されたが、日本ではより『家』の持つ力が大きく、日本の家族療法の中心は、家に戻って、適切な枠組みのもとで治療し、そこに納まることが目標となり又現実的であるのではないか」(ケース186)

この他にも、家族療法経験年数別に、教育あるいは職業別に自由回答の傾向性を浮き彫りにできれば、さらに興味深い結果が得られたものと思われる。しかし自由回答故に、コンピュータによる

データ解析上の困難もあって今回はその試みを断念した。以下は、回答者が自由に記載してくれた家族療法観を、一覧表にまとめたものである。この貴重な資料をさまざまな形で活用していただければ幸いである。なお、明らかな誤字、脱字を除いて記載された原文をそのまま収録することを原則とした。このため、やや難解な部分を含む記述も散見されることになった。また判読し難い場合は、その個所にxxxを記しアンダーラインを付しておいた。自由回答欄に全く記載のなかったケースについては、煩雑さを避けるため表記を割愛した。

3. 自由記載一覧リスト

D5 「家族療法の定義にはなかなか難しいものがありますが、家族療法のエッセンスは、あなたにとってどのようなものだと感じていますか？」

回答者番号	自由記載内容
001	家族システムが、自ら第二次変化を起こせるように援助する家族アプローチである。
002	今迄の個人内の心理状態のみに注目しすぎた心理療法に対する、理論的根拠を扱った治療法。
003	家族を扱うことは非常に魅力的ですが、現場の様々な条件の中では、これをきちんと行なうことは（技術は別にしても）なかなか難しいです。家族療法的視点を持つこと、場合によってIPの家族に会っていく時に、何をポイントとしていくかというところで利用している段階です。
004	何も特別な理論や技法ではなく本人の症状や問題行動のために家族が苦しんでおり、家族の応援がなければ改善につながらないのでから、当り前の必要なアプローチなのです。
005	これにお答えできるほど知識がありません。
006	家族員の誰か一人が出している症状をその個人に帰属するものではなく、家族としてシステムに帰属すること。
007	人間関係のシステムに焦点をあて（どのシステムを選択するかは、そのケースのための予測的有用性による）関係の重層的、力動的側面に関与しつつ観察しセラピストの治療道具性を使用しつつシステムの変化を引き起こしてゆくこと。エッセンスは関係の重層的な認識のし方（エピステモロジー）に存すると思う。
010	IPにとって望ましい方向に家族内人間関係が変わることを期待して始めたが、現在は家族員のそれぞれの成長と人間関係の変化も療法の目的と考えている。しかし私自身が戦略的な技法、ことに逆説的治療は出来ないし、欧米の人と違って日本人の場合家族療法を受ける方もそれをうまく受け取る人が少ないのではないか、という気持ちはかわらない。また分裂病、難病的な神経症の人が多いので面接期間回数も決めていない。それが良いかどうかわからないが。また病院の性格上、家族療法の費用はとれないがそれが良いのか悪いのかはわからない。 時には家族も患者として投薬精神療法を行っている場合もある。
011	長年、主として分裂病境界例等の個人療法に苦労して來たが、家族療法を行って以来視野が広くなり、IPの理解が深まりIPと家族との間も改善された。短期間に劇的な効果をあげる場合もある家族療法のエッセンスに、IPを個人としてだけ見るだけでなく、関係（家族・社会）の中で理解出来るようになった。尚、個人療法より心労少なく、時には楽しく、終了後余り疲れないですっきりする。 尚、終了後のスタッフ間の協議は甚だ有意義である。
013	本人だけの問題と考えずに家族全体のシステムの問題として取り扱っていく考え方と思っています。しかしながら、ともするとその介入の技法だけを修得し、個人面接がしっかりと研修をつんで丁寧にできない場合も許容されてしまうことが最近少し出てきたと、以前学会でも聞きました。個人療法もしっかりとやれた上で家族との関わりを常に考慮していくということを、自分としては考えています。
015	家族の力を引き出し家族自身が問題を解決するのを援助していく治療法。
016	家族員が男として、女として、親として、（父として、母として）子供として（長男（女）……次男（女）として）のアイデンティティを確立し、人間的に成長していく過程を援助すること。
017	家族の構成員に働きかけることによりその相互作用を望ましい方向に変化させ、問題を解決していくもの。
019	全体（家族）の成員を変えることで全体を変えていくという作業を同時に行う治療法。
021	(1)家族の認識の変化を導き家族の問題解決能力を高めるもの。その為にはケースの病理性を把握する必要がある。 (2)家族に繰り返される非生産的なパターンを生産的なパターンに変えるもの。その為には過去が問題になることもあるし、分析が必要になることもある。
023	チームとして扱うにはスタッフがおらず単独で行うにはエネルギーがかかりすぎる。そのため現在では行っていない。力動的な視点から家族にアプローチすることはあるが、これも、自分の中では家族療法と思える時もある。
025	家族メンバー間の交流を活発にさせ、家族の力で、問題解決を行わせる。セラピストは、保護された自

- 由な空間を守り、この中に（日常生活と違った空間）身をおき、自由に討論しあうことで本来の力を回復させると思っている。
- 026 有効性の限界を常に意識していること。
- 027 家族全体のシステムを考慮に入れて行うなら治療はすべて広い意味で家族療法ですが、狭い意味では、2人以上の家族メンバーに対して実際に来院してもらって、相互の関係性を中心に扱うのが家族療法だと思います。
- 029 本人だけでなく、家族も視野にいれておく
 ①本人の治療を中心として、必要な場合（本人がのぞむ時）家族にも会う。会って同時に平行的にみて行くが、治療者を別にするかケースバイケース。
 ②家族からはじめに相談をうけた時、その相談のみで終わる場合と、本人をひっぱりこむ場合と両方やる。
 ③一日50人（平均）患者をみていると特別のことは出来ないので、およその見当をつけたら専門家（多くはCP）にたのむ、時間をかけない普通の医療は継続することが多く、CPから情報を入れてもらう。
- 030 家族内の人間関係を、IPが成長（あるいは生活の改善）するように、変えていくための関わり。
- 033 家族全体が自分の問題としてIPの問題を考え、自分の問題をそれぞれが家族の中で解決していくことを通して、IPを含めてその家族の健康度を向上させていくものであると感じている。
- 035 家族の視点を重視し、個よりも関係を重視するもの。
- 038 • 家族成員および総体としてのシステムが各成員個人にどのような影響を及ぼしているか。
 • 成員個人、特にその内的世界が家族システムの中にどのように反映されているか。
 これらをリアルタイムで観察し、治療的介入を行うことで家族システム及び成員個人の心理社会的健康度を高める治療法。
- 039 IPがこれまで維持してきた家族との相互関係のために、家族を離れた現実環境とのギャップで多彩な症状を訴えて来院する。そのIPが治療により、これまでの家族との相互関係のあり方の変化—改善が促される。そのためIPと深く関わりを保ってきていた一つの有機体というか、ユニットとしての家族の相互関係に混乱（—当然下位システムの混乱を含む—）を招くことは当然のことである。そしてIPの改善に並行して、家族の混乱を支え、援助していくのも、家族療法の大きな利点であると、これまでの臨床体験を通じての所感である。極端な表現かも知れないが、IP個人の示す多彩な症状は、その症状の背後にある家族の問題もあり叫びでもある。
- 040 家族の力の回復をはかるもの。ということにかかっていると感じている。
- 042 本人の抱えている問題や症状が家族間の人間関係に根ざしているものであると仮定し、その固定化した家族間の人間関係を解析し、家族の成員ひとりひとりにその原因を気づかせ、それによって症状の消失、問題の解決を計ろうとするものである。
- 046 まだ、なんともわかりません。
- 047 私の分裂病中心の臨床においてはあまり出番のないもののように思います。それはまず孤立者、欠損家庭、貧窮家庭が多いからだと思います。家族が意見を揃える余裕があり、またそれだけの時間的犠牲を払う気持ちになっている家族に対しては良いのだろうと想像しますが、この条件はかなり選別になります。おそらく強制的に呼び出せる家裁などの適用が現実的なのでしょう。
 もう一つ、何百年という家の重荷を背負っている旧家の家族の場合、その場を支配しているのは“亡靈”だということを再三感じます。
- 048 認識論的転換をもって“治療”というものを科学の眼で真しに見つめ、臨床対峙する一つの治療哲学。
- 049 家族という特別な集団における集団精神療法である。基本は相互のcommunicationの回数である。大体はコンサルテーションですませ、それでうまくいかないとき合同家族療法。
- 050 ジョイニングと枠組づくりさえできれば誰でも成功するが、それに失敗すれば誰がやってもうまくいかない。
- 051 面接者に心理的余裕を与え、来訪者に変化や将来への希望を与える。
- 052 構造化された家族療法を開始出来る家族はそれだけで改善の可能性が大きい。家族療法自体がどの様に行われるかよりも、いかにどの様な構造の中で現在の治療が進められ、そのどこに家族療法が適応となるのかを見定めるグローバルな視野での治療が望ましいと考えている。
 • 家族療法自体が開始（構造化、治療契約なされた中で）されれば、少しでも現在のなれ親しんだシス

テムより、より良い流れに変化する事を体験していただく事であろう。家族療法では誰が悪いわけではなくそのやり方、行動の相互関係に問題があるという考え方は治療者にとって気が楽な有用な方法であると思う。

- 0 5 3 communicationを変化させることで、それまでの見方からの解放を促すもの。
- 0 5 4 エネルギーの要る仕事が面白い技法である。
- 0 5 6 家族の内にある、援助を求める力をいかに見出し捉えられるか。
- 0 5 7 (1)その家族が失いかけている回復力、成長力を活性化することで、家族が家族自身の力で課題を克服していくプロセス。
(2)個々の家族成員の内奥に深入りすることなく、しかも病理（課題）を成員間の関係性の病理と見なすことで、特定の“悪者”を作らずにすむ（セラピストからの逆転移が早目に察知しやすい）。
(3)広くシステム療法と考えることで、治療スタッフ間の関係の改善、あるいは患者スタッフシステムの改善等、応用可能性を秘めている。
- 0 5 8 病人を作らず、Normal Family Processを目指して、家族を援助すること。
- 0 5 9 一口では言いがたいのですが、発想の転換のきっかけとなり治療が一パターンの堂々めぐりに陥るのを防ぐ部分が自分にとっては一番役立っているように感じます。
- 0 6 0 広い視点から問題にアプローチできる手法である。
- 0 6 1 家族というものを大切にすること。
- 0 6 2 システムと愛
- 0 6 5 家族は個人のcontainerであり、そのcontainerに不備があっては個人療法は進展しない。家族療法は、個人療法の有効な援助手段である。
- 0 6 7 家族を治療するのではなく利用するのに過ぎない。
- 0 6 9 家族の相互関係を面接室の中で見聞きし「今ここで」（治療者もその中に入り）これまでの悪循環を良循環に変えてゆく方法。（過去を殆ど問われない、且つ肯定的に受けとめる健康な所に焦点をあてる、逆転移のほとんど起こることのない方法。）
改善効果のあるもの……という症例選択はあるように思うが如何でしょうか。これは今までの試行錯誤の結果の印象ですが。
- 0 7 0 人間関係の矛盾と逆説に対する深い洞察があれば、誰でも行なえるものだと考えている。
- 0 7 1 IP（この言葉は好きではないが）もしくは家族の持つ疾病モデルの理解。
- 0 7 2 個人、家族、社会と言う人間発達の歴史の中での一つの型として、家族に重点をおいた処理法。
- 0 7 3 家族と共に自分自身も変化し一進一退をくり返す様を客観的に省る機会を与えてくれるように思います。
- 0 7 5 一般システム論に基づく、家族を一つのシステムと考える大変ユニークで有効なもの、と思っている。
- 0 7 6 家族はひとつのまとまった有機体である。そして回復能力を持っている。その回復力を促進し、活性化するために、様々な介入をする。特に家族メンバー間のコミュニケーションの改善を行っていくのが家族療法である。
- 0 7 8 “from outside-in”（構造、機能によって意味作用をactivateする）ということ
“pre-oedipus水準をoedipus水準で加療する”
“Tensionを高めることで新しいby-passを導く”
“positive-annotation-reframing”
“症状を大切にする”
“Therapy of context/ecology”
“Aikidou”
- 0 7 9 分裂病についてのみ、障害者として在れる分裂病者であるように働きかける事。援助する気がある人の関係の調整。治療者にとっては自らを知るという……（判読不明）。
- 0 8 0 既存の治療概念にとらわれることなく、柔軟な発想でもって主訴の解決を図る治療法である。治療の対象は個人というよりは家族システム、もしくは、社会システムである。つまり介入の対象は家族全員でなくてはいけないということはないと考えられる。
- 0 8 3 家族の調和と成員個々の独立。（障害者を抱える家族の悲哀の仕事の進展）
- 0 8 4 家族の幸福度を上げるもの。

- 0 8 6 家族関係のrestructuringを通してひとりひとりが自分に気づいていくことを援助していくものという感じがしています。
- 0 8 7 一人の病人の背後にある文化を捉えることが今後あらゆる分野で必要と考えています。そのために家族の中での病人を如何に捉えるかが必要と思います。
- 0 8 9 (拡大解釈となるとは思いますか) 病状を訴えて来院する患者のみを治療対象とするのではなく、(一つの家族の一員と患者をみなして) 家族全体を治療対象として、考える姿勢が家族療法につながっていくと考えています。
公立病院の小児科で勤務している関係上、それほど重症な患者は少なく数回のセッションで関係調整をしていくだけで、症状が消えあるいは再登校できるようになるケースがほとんどです。(明かな境界例が3人いますがこれは例外として) 技法をさまざまに駆使しなければいけない例は稀です。正式な契約もとりにくく、また、設備もなく、人員も少なく勤務時間外にボランティア的にやっているのが現状です。何とかしたいのですが、無理のようです。
- 0 9 0 家族療法の有効性を感じていますが、現在までの、私自身の治療の場においては(短大学生相談室) さして必要とされることはありませんでした。ただし緊急時家族が来談されます。B2で回答したように、家族療法的な考え方方は身につけておきたいと思っています。
- 0 9 1 家族内力学の修正(実際にやってみてうまく行くと最高だらうけど、收拾がつかなくなると恐いだらうなあ)
考え方としてはIPという捉え方が家族だけでなく職場とかにも心理教育的なものを持っていく(生活臨床と対応するものになりそうな)可能性と、障害への差別とか偏見とか緩和する方向への可能性(反精神病医学でとりあげられている問題が少しでも解決する方向へ)を期待したい感じ。
- 0 9 3 家族内において、IPと構成体員間、及び固体相互間の関わり方改善を、IPと個体各々に気づかせる道を啓くことではないかと思う。
- 0 9 4 かつてサリバンが言ったと云う「個性(個人?)とは幻想である」という当り前の事実も、個人主義の欧米社会が「再発見」する過程とも言える。「家族」が核家族化し、崩壊してゆき、「個」への還元の末に再び回帰する過程で登場してきたように見える。単なる通行でないことは無論であるが。日本に輸入してきたブランド商品のようにも思える。エッセンスとしては、誰もが重要な他者、風物とともに、人生を生きていると云う事実である。そして、今現在の関係を生きていると云うことである。「個人」とか「自立」とかは絵に描いたモチかも知れないと考えさせてくれる所である。二人だけの密会しか許されなかった時代から、二人以上の場に介入することが、許されるようになったと言うことである。
- 0 9 5 家族メンバー間に生じている病因的あるいは疾病増悪的なコミュニケーションのパターンの反復を、専門家の何らかの介入によって変更又は消失せしめることによって、家族内の一部に見られる病的問題を解決しようとする方法である。それが、単独で有効な場合もあれば、他の治療とのコンビネーションで有効な場合もある。
- 0 9 6 正確なアウトサイドの獲得メンバーの成長と自己開発能力獲得
- 0 9 7 僅かな臨床体験ではありますが私が関わる機会をもてたクライエントの多くは、その表だった病状故か家族の歴史背景などが織りなす歪曲した構造の責任全てを身に背負って、生活してみえたようなそんな感じを私は強く受けています。病状を出さざるを得ない者が心身に感じとる辛さは自らがおかれた状況と重ねあわせた時一層強いものとなって個人を苦悶させるようにも思います。そういうた隘路にはまりこむような思考回路に循環した広い視野でのぞむよう、気づきを与えてくれるのが家族療法のもつ最たる魅力と私が位置づけている部分です。刻一刻と移り変わり一時もその場でどまっていない脈うっている家族を流れのようにとりあつかう点circularでsystemicな考え方こそが今の時点で、特に素晴らしい感じ意欲をかきたてられているところです。
- 0 9 8 人間は、個としての尊厳を保ちながら他者との関わりの中で存在している、という視点を実際に治療の中に、実践可能な形でとり入れた治療法である。
- 0 9 9 家族を一つの単位として総合的に把握し、システムを通し介入することによって、個人及び家族の問題が解決される。
- 1 0 0 家族自身がもっている内在的問題解決力を引き出し、問題を克服していく力が育つよう援助するものである。

- 102 家族のシステムを治療対象にしている治療アプローチを「家族療法」と考えています。そのシステムの力動の変化から、IPの病状消失をねらっているものともいえましょうか。
- 103 セラピストが家族間の潤滑油となり、家族自身が自分で問題解決をしていくのを援助すること。
- 104 良いスーパービジョンと質の高い臨床経験。
- 106 治療者をも含めてIPを取り巻く人間集団では悪循環がおこりやすい。その悪循環というノイズを除外して問題の本質を整理していくために有効であると思う。
- 110 各家族員のシステム変容を考える。
- 112 家族システムに焦点をあてた介入による療法である。
- 113 systematicに家族を理解し dynamics を変化させていくことに主眼をおいた治療。
- 114 一人の最も問題意識の強いメンバーの変化が家族全員に波及する。
- 115 精神病を個人（患者）だけの問題として考えず、家族全体・社会全体の問題としてとらえる姿勢が、家族療法を通して身についたような気がします。また、私個人としても家族内における自分の立場というか役割を考えるようになりました。
- 116 フルコースの食事を味わう時のバックで流れている音楽のようなもの。音楽によって知らず知らずに食も進むしどんなにすばらしい料理であっても箸をつけたくなくなってしまうこともある。
- 118 家族内のシステムと家族一人ひとりの役割分担に焦点をあてた介入方法。
- 119 クライエント（IP家族員も）の抵抗をより低くかつ比較的家族が取り組みやすい面接形態をとって解決へと導ける治療法。
セラピストがまきこまれずに治療にあたれる。感情を操作することは誰にも（本人にも）出来ないので周囲のシステムを変化させるやり方で解決を導き出すと、メリットが多い方法といえると思う。
- 122 患者本人のもつ悩みを家族に理解してもらうこと。家族からみた患者本人の常の生活態度や言動を治療者が知り、本人、家族（両親や患者本人が対象としている家族、学校、地域の人）と治療者が相互に影響しあってより良い治療方向へもって行くための一つの治療法と考えている。
- 125 ①家族の存在は、たしかに独自のシステムをもち、実際に臨床的に最も重要な治療対象として今後も大いに検討されていくべきものである。
②しかし広くシステム理論にたてば、家族は人間にとて一つのシステムにすぎないのであり、今後は家族と学校・企業地域精神衛生との関連がもっと追求されるべきであると考える。
③家族療法の中で発展した諸理論や技法は、単なる治療法にとどまらないメタレベルのものをもっておりそれだけに種々な領域での応用可能性はきわめて高い。たとえば個人療法の形態でも十分に家族を扱うことは可能。
④家族療法の専門家を育成するだけでなく、特に一般臨床医が日常治療の中で、家族をどう理解し、接したらよいか、基本的な考え方の啓蒙教育は是非必要と考えられる。
- 126 複雑なもので、各療法のようにひとすじなわけではないのが、面白く楽しいのかも知れない。
- 127 IPの病状や問題行動を個人の病理性として把握するのではなく、家族全体のシステムの歪みの表現型として捉えることにより家族内でのIPへの注目が減少し、家族内のコミュニケーションパターンや役割が変容することにより家族内の緊張も減少する。こうした働きによって、IPの症状や問題行動そのものもつ意味が変容し、ケースネスとして浮上しなくなったり、実際に病状、問題行動の表出も少なくなる。
- 128 治療に関与しながら観察が有効できること。
- 129 •IPの示す「問題」を「全体としての家族」の中で捉え家族力動を明らかにし、その力動を動かすことによって「問題」の軽減ないし、解決をはかるとするもの。ただし、技術論的に偏りすぎる嫌いがあり個人病理の深い所までの解決がはかれるかどうかは疑問であり、表面にでている「問題」を操作的に扱うだけでどの程度の治療効果を上げられるかどうかは私としてはわからない。
•日本人の心性や特性に適した治療手段であるかどうかが今後とも検討を加えて欲しい。
- 130 •治療者の認知の枠組みを変えるところに強いインパクトを感じる。
•こだわらない点
- 131 ①旧大陸に住んでいた欧洲の人がアメリカ大陸に上陸したようなもの。長い間昭和30年代薬物とヤスパースに始まる精神病理40年代の分析と地域理論の時代での閉鎖感。50年代家族療法で日本での力動精神病医学が現場でつぼみがふくらむ。それまでの学問で出会えなかった人間と家族の未知の部分と毎回出会って感じる、知らない見えない新大陸希望がひろがる。このことは毎回の臨床の場にその個人、家族

とともに出会いにもあるエッセンスでしょうか。

②技法だけでなく治療者がその背景と下層にどれだけ準備されているかが大切。

③家族療法も人間理解への一つの武器。万能でないと思って作業している。適用のテーマ。

132 IPおよび家族のgoodな適応をめざす道具技術にしかすぎない。

133 個人精神療法を全体にPatient Therapist関係を支え、Patient Therapistに発展促進的環境を提供する家族への援助。

134 たまたま患者（又は問題児）となった一人を中心に、そのとりまく家族全体の問題意識を高め、成長と自立をめざすもの、と漠然と感じています。

135 •家族に対して肯定的な関心を基本的姿勢として、もつこと。

•病状や問題行動を社会的対人的文脈の中において理解する視点。

136 既存の家族システムをこわし、新しいホメオシターシスへと家族システムを変えること。

137 家族成員のパワーが治療的に働くもの。セラピストの重荷を少なくするもの。

138 児童相談所における家族療法と前置きした上でであるが

①家族の持っている力を、病状の改善に向けて引き出す。

②因果論にとらわれず、役に立つ方法を見いだすためのあらゆる創意、工夫。

③仮説、検証を徹底して行う、セラピストやワーカーの自己満足的処遇を許さない。

142 平面的なIPとの関係をより立体的な関わりにまでひろげていく緒となる思考方法かつ実践的戦略的なアプローチ。

143 ①家族をシステムと考える。

②そのシステムはコミュニティ・社会・物理的環境など上位システム内にある。

③そのシステム内の個人はさまざまのかたちでサブグループを作っている。

④このシステムと上位システムの間、下位システムとの間のバウンダリーの操作をすることによってシステムの働きを考える。

⑤この動きを変えるために種々の形でセラピストがはたらきかけをする。

④⑤が有効にはたらけばシステムは変化しその変化が家族の機能をより生産的創造的にする。

144 人間は目の前の相手次第によって行動を変えることを認めてかかる必要があり、それをシステムティックに扱うのが家族療法だと考えております。

146 家族を治療するというのではなく家族の力動を活用してIPの治療あるいは社会性を高める方法と考えています。IPを含めた家族成員間の関係に変化をもたらし、それによって、IPの症状にも変化の生じることを期待します。結果的には家族が好ましい関係に変化すればと考えています。

147 硬直状態の“変化”

148 家族成員相互の信頼回復へ向けての援助であり、その対象は家族システムである。このように感じています。

149 個人の内面に深く入っていく従来の方法のかわりに、個人と個人の関係に焦点をあてるものの見方。

150 家族全体が今までとは違うパターン、思考、価値観などを持てるように治療者も参加して、その場にいる全員で協力するもの。

152 大きくわけて

①Family as a wholeな家族療法と

②Family as a systemな家族療法があり

②の中にはMRI Brief Therapyと構成主義がある。自分としては②に属するものを家族療法を感じている。

154 家族の全体システムに対する治療的な働きかけである。

155 家族成員ひとりひとりの成長のために、家族システムを発展促進的なものに変容してゆくこと。

156 患者の苦悩、苦痛、問題行動のみに焦点を当てるのでなく、家族とも含めた人々全員の苦悩、苦痛を減らし、よりそれぞれが生きやすくしてゆくための治療的援助。

157 病気を病者を含む人間関係の（円滑な）機能の障害としてとらえ、病気の原因探し（悪者探し）ではなく、関係者・当事者の問題のとらえ方、率直な感じ、気持ちを尊重しつつ、介入者も関係者の一員として、自らを活用しながら、関係の障害を回復していくこと。

158 普段あまり意識しない家族全体の動き、関わりをあえて言語化したり行動化したりすることで

- ①いつの間にか型にはまった家族相互作用のパターンに揺らぎを与えること。
- ②できれば、さらに家族員それぞれが、自分の家族をみるフレームになんらかの変更、修正が生じること。
- ③これらをその場限りでなく一定期間持続させようとする諸種の技法の総称。

- 1 5 9 関係性をあつかう。
- 1 6 0 家族を一つのシステムとして捉え、個人を変えることにより家族相互の関係やコミュニケーションパターンを変えることによって問題が解決され、世代間の境界の確立が自律へむかい、家族の機能が変わること。チームで当たるので安全な方法ではないかと思う。
- 1 6 1 ①人と人との間のinteraction、グループとグループとのinteractionなどinteractionに注目し、
②家族なら家族という集団をシステムと考え、そのシステムにジョイニングすることにより、「問題」の「解決」を、家族と治療者とで共にめざそうとする治療法を考えます。
- 1 6 2 だれでもが安易にできる技法ではないが、実力のあるスタッフと設備が整っていて家族療法にあうようなケース（経済的にも時間的にも家族病理の点でも）が来れば非常に有効だと思う。
- 1 6 3 家族を最小の社会生活単位として、この中外に生じる交流上の問題を家族システム、コミュニケーション等を変化させることで解決していく治療法と考えている。これは私にとって健康問題を考える時WHO定義の社会の健康をとらえながら身体精神の健康を、ある理論にもとづいて予測できる方法だと思います。
- 治療そのものにはまだ関わっていませんが、多くの人の健康問題を考える上で私の枠組みを広げてくれている考え方の一つになっているような気がしています。
- 1 6 5 個人の心理臨床像を家族というファクターを通して理解しようすること。そのために家族というものを一つの有機体としてとらえ、その動きを見る上で有効な理論だと思います。
- 1 6 6 日本の精神医療制度が、家族療法あるいは余裕のある医療体制にあるのかどうか認識してほしい。家族療法をシステム化したり、回数を決めたりといった関わり方には反対。治療目標をどこにおくのか、家族関係がそう簡単でたやすいものであるとは思えない。
- 1 6 7 家族自身の治癒力で家族自体が動きをもって発達していくもの。その動きをつけ変革するために家族システムに入していくものである。
- 1 6 8 様々な理論、技法が今日情報として入ってきているため、仲々短い言葉ではまとめられないが、私が行ってきた家族療法の中で「これだ」と思われる重要度の高い順に述べさせて頂くと、
①家族をシステムとしてとらえ、行動をもコミュニケーションとらえ各成員のコミュニケーションの連鎖と症状あるいは問題との意味づけをポジティブにしてゆく作業を行う。
②各成員の意見や不満アイディアなどを充分に時間をかけて耳を傾けていき、治療者との信頼関係を高めていく。
③一回のセッション後半の介入および課題（家族への）はあくまでもオーソドックスな常識の範囲内で家族にとってもxxxxにおちるものであることが望ましい。
④治療チームは、柔軟な思考のとれるメンバー構成であり、かつ理論や技法にも充分精通している必要性がある。以上まだまだ述べたいことはあるが、紙面の都合、上記の4点が大切なものを感じていることを簡単に記させて頂いた。
- 1 6 9 本来、在る力（家族内の自然治癒力）を有効に利用できるように、システムを調整していく作業である。
- 1 7 0 物の見方、考え方の転換である。
- 1 7 1 家族の流れにそいながら家族自身が本来有している解決力を引き出していく、あるいは、解決に向かって（家族とともに）援助していく方法を考えます。また、個人の症状を通して家族全体の気づきと変化を促していくものだと思います。家族メンバー同士の交流、相互作用に注目している点が、私には、フィットします。
- 1 7 2 家族システムの成長、発展を手がかりに、個々の家族メンバーの成長自律を促す臨床的アプローチ。
- 1 7 3 家族システム（核家族、源家族共に）についての理解を深めることで、システム内の個人は自主的、主体的に“機能”を変化させる。
- 1 7 4 構造の変化communicationの変化
- 1 7 5 家族内力動の理解とその効果的な利用による家族及びその成員への援助。

- 176 簡単にまとめるには困難です。
- 177 個人療法の限界を打ち破ることができる可能性があり、病態によっては第一選択となりうる。
- 178 第三の目を生かすこと
- 181 家族クライシス介入を考えている。あとは技術的にならないことだと思っている。
- 183 家族が相互に影響しあっているということに気づき、問題を解決しようとして協力し、全員が少しずつ変化しうる可能性があること。
- 184 大変難しい質問です。分裂病者の家族関係・対人関係の調整を主に臨床課題としていますので、自我障害のレベルをよく理解し、その障害を少しでも実際の生活の中で、軽度のものにしておくためには、外的（具体的）な人ととの関係、環境の調整はとても大切な治療的意味を持つと思っています。システム的な関係の変化は、自我のあり方を変えてゆくための大きな力だと思います。
- 185 危機介入
- 186 システム理論に基づくものであり、認識論の転換である、従って従来の個人療法的治療観を更に広げ、治療の新たな可能性を示した。それと日本における家族療法のエッセンスは、「家族の中で治す」ということであると思う。精神分析的治療観は家からの自律、独立、個別化が高く評価され、目標となり、それを目ざして治療されたが、日本ではより「家」の持つ力が大きく、日本の家族療法の中心は、家に戻って、適切な枠組みのもとで治療し、そこに納まることが目標となり又現実的であるのではないか。
- 188 システムズアプローチに基づく家族療法というイメージが強いが、システムを変化させることで個人の問題を改善させるやり方であり、システムの中で家族を選ぶのはIPにとって最も影響を与えセラピスト自身も対応しやすい為である。家族療法と言うよりシステムズアプローチと言う方がしっくりくるよう感じている。
- 189 家族をシステムとみなし、そのシステム内の固定化した相互作用のパターンに介入し、それに変化を起こさせる治療的アプローチであり、個々の家族のもてるホメオスタシスに絶対の信頼をおき、機能不全をきたしている悪循環過程のノーダルポイントに積極的に介入し、固定化した家族相互作用のパターンに変化を起こさせ、その結果として症状行動を消失させるものである。
- 190 家族をシステムとして考え家族関係のあり方に焦点をあてる。
問題解決への努力の積み重ねの歴史の存在に介入していくことで、家族がより良い機能的な交流パターンを発達させられる様なコンテキストを作り出す。
- 191 家族成員が相手の意図をお互いに察することが再びできるようになること。もの言わぬ関係の成立。
- 192 システムズアプローチである。
その家族の持ち味で健全に機能することを援助する療法である。
- 193 人間が抱えている問題を家族の力を用いて解決していく心理療法の一つ。
- 194 IPだけを取り上げずに、家族全体をみれば、他の社会的な意味の上位システムも理解して可能な部分での変化を促すやり方である。対応は、共感を軸としたカウンセリング技術や問題の定義のやり方は、色々な流派の考え方を応用して、行動を定め一仮説一実施一検証をくりかえしきりかえし行うことでIPおよび家族全体の力をプラスに向わせるものである。
- 196 システム論的な考え方をベースに、ある問題をとりまくシステム（外部環境との相互交流をもつ構造）を変化させることにより、問題解決を計る援助技法。
- 197 （ポジティブ）リフレーミングによる問題性の減少または消失。
- 199 個人をシステムの中での関係として捉えるもので、人間を生物的次元より、より社会的次元で見ている進んだ治療法。「家族」だけでなく、さまざまのシステムに人間はいるので、この療法はいろんな分野に応用できると思う。システム療法といった方がいいのではないか。
- 200 最も広い視点をもった柔軟で無理のない治療法。
- 203 家族をシステムとして考えること。家族の問題をIPおよび家族に投げ返し問題の持つ意味を深めていく。そのために家族の全員参加、スタッフの協同作業が望ましい。
- 205 方法としてはこんなことに配慮しています
①困っている問題を具体的に明かにし、それに対しての家族成員全員の解決努力について聞きその中で家族の相互作用に焦点をあてながら家族のシステムに介入する。
②なるたけ具体的に簡単にやれることから家族と共に考えながら行う。
③治療への家族の参加と家族の今までしてきた努力を評価し家族のつらさを理解する。

- 家族成員の問題がこの家族へのメッセージとして相談員に受け取ることができ、このメッセージを家族と共に考えることではないかと思っております。
- 206 最初の定義がエッセンスと思っております。
- 207 今盛んなシステムズアプローチに関していえば、分裂病や子供の進学不登校問題など厄介な問題が家族に課せられた状況で生じてくる家族員間のソゴ(dyscommunication)とそれに伴う家族内の混乱や、感情的な不協和に対し家族員それぞれの考えを言語化させていくことで、communicationを促進し、家族員どうしの一つの合意(consensus)に至る過程。その過程で治療者が家族員間の中立的なfacilitater(分裂病の場合には、病者と家族の間の翻訳者ともいえるかもしれない)を演ずる。現在は以上のように限定された形で「家族療法」を一応行っています。
- 210 家族に参加してもらうことによって家族教育や家族のシステムの変化などができる、それによりIPの力をより健康な方向へ導ける可能性をもつ。
- 211 治療の新しい形として、今後絶対必要になってくるもの。
家族が被害者でも加害者でもなく全員で病気と向き合う重要性を忘れずに続けていきたいと思います。
- 214 「家族が健康な方向に変化する契機となるもの」と感じている。
- 215 関連病院には、観察室やビデオカメラなどを備えた家族療法室があり、教室員が家族全員を集めてシステム論にのっとって正式の家族療法をしていますが……
大学には設備がなく家族(主として母親)面接をしているのみ、これはpsychologistが母親を、主治医がIPと並行面接を行っている。
Dの質問に対しては上記のような状態を答えるつもりですがピッタリした答えは出来ませんでした。
ex.・D4の③②とは並行面接のこと
- 216 私自身個人面接を実施しているが、家族同席の場合もありその際のアプローチには家族療法的関わりを参考にする時がある。しかし個人面接であっても家族療法的視点があつて、そこからも焦点を合わせてみる場合もあって(リフレーミング)全て私の治療の中の一つの視点となっている。「家族」という個人の集合を越えたものとしてとらえ、個人がどのようにそこで生きているか、或は個人によってどのように家族が機能しているかに焦点を合わせて家族または個人の問題解決をはかる。
- 217 問題を持つそれぞれの家族が家族間の関係の歪みの修復を望む時、手をかし、その家族に応じた方法で、助けて行く療法。
- 219 自分は精神分析ユング派に近いと思っているが個人の内界に入りこんでいくやり方と対局の考え方であり、その考え方を知っていると頭の中のバランスがとれると思う。ユング派では個人一集合無意識(社会・国家)というように拡大するが家族療法はその中間段階を扱っているといえる。
- 220 それぞれの材料をうまくあわせて料理する料理人のようなもの。一流のコックは目指していないものの「煮込み料理はすごくおいしい」と思えるぐらいには目指したいと思っている。
- 222 家族へのアプローチには大いに関心がある。学会発足まえのワークショップから参加していくながら家族療法としての治療形態をとり入れるに至っていない。当初は操作しすぎるとの感も持ったが現在はそうは思わない。家族療法的アプローチはその時その時の必要性を充すものだと思う。もちろん家族同席面接が可能で必要と思う場合は要請して行うし、必然的に同席面接になる時もある。個人面接でも特に母親の教育相談の場合は見えてくるシステムを動かすアプローチをすることもあり、それは概ね良い結果につながる。しかし筆者にはペーシックなところで人間の心の深いところに巣喰う対象関係へ目がゆく心性があるようでありどうしても個人療法が得手ということになっていく。
但し学会に参加することは、別の視点を毎回提示してもらう楽しさがあり同質の治療例の多い心理臨床学会よりは家族療法学会の参加の方が毎年の喜びになっている。このような学会員の存在を受け入れていただければ幸いに存じます。
- 224 人間(人類)が人間らしく、充実した生活をしていくための援助。
- 225 生物的心理的・社会的問題の解決に家族システムを活用することは有力な方法と言える。システムの病的な部分でなく、健康な部分を最大限に活用する。
- 228 思春期外来を受けておりますが、普段の外来診療でも家族システムを考慮に入れつつ治療をおこなっています。この場合家族療法だと考えると前記の質問に答えられなくなります。一方で数名のスタッフと共にミラノ方式での家族療法も行っており、ますます困惑していました。
- 229 システム的に理解することに、個人療法で解決できない点を解決出来る場合がある。

- 2 3 0 問題行動や病状を出している個人だけをとりあげるのでなく家族のダイナミクスに視点をおいて治療をすすめていくこと。
- 2 3 1 それを用いる事によって良くなる家族はより早く良くなる。
- 2 3 4 家族システムにゆさぶりをかけて問題解決のための新たな糸口を家族と一緒に見つけること。後は家族の治癒力を信じて家族自身の力で動き出すのを見守る。
- 2 3 5 精神医療等人間理解に関わる問題の新たなパラダイムを提示してくるれるもの。
- 2 3 6 将棋に例えると、「持ち駒が多い」ということかな?
- 2 3 7 一人の被面接者の相手をしていても家族全体への影響、介入を意識して行う治療法。
- 2 3 8 Family as a whole
Identified person
- 2 3 9 ①メタポジションから人と人、人と制度の関係の全体を覚えること。そして、関係を覚えることを通して(介して)個人のありようを変えてしまうこと。
②家族自身の力をを利用して家族を変化させる技。
- 2 4 1 家族のもつ問題解決への力を引き出す、あるいは方向づける援助をすること。
- 2 4 3 精神科の病院での家族療法は広い意味での家族関係の調整、家族が家族システムや自分達のパターンを理解し、変化させる為の援助と考えています。入院している患者だけに焦点をあてるのではなく、患者を含めた家族に対する働きかけをすることが患者のみならず家族全体への援助になっている体験をすることで、私達の励みになっています。
- 2 4 4 治療者と家族が共に小さな変化を目指し、それを達成したと互いに感じられた時、今までにないものがはじまって。その体験こそがシステムを変えていく源泉になるのではないか。
- 2 4 5 変化の技法
- 2 4 6 現在私自身4才、2才、0才の子供を育てながらフルタイムの仕事をしています。まさに今は自分の家族の土台固めの時でもあります。この点で「家族」とは、理論や知識で作られるものではなく日々の日常生活の複合体であり、結果だとつくづく感じます。心理職として、これまで「子供」の問題行動を病院で出会った時は、まずfamilyのシステムとして考える枠組みがあったのですが最近は「ここまで子供を大きくした」親の苦労にも共感できる自分があります。今は家族療法を外で学ぶには時間や余裕はありませんが、今の子育ての中で得るものも今後の家族療法をする際に役に立つだろうと考えています。そんな意味では「家族療法」とは、治療者の役割だけでなく私自身の成長をみる鏡でもあります。
- 2 4 7 最近は自分達がやっていること、考えていることを家族療法ということばで表現する(される)ことに抵抗を感じています。ほとんど家族という視点にこだわらなくなってしまったからです。
システム論にはしっかりこだわっているが、別に個人家族夫婦その他のグループなんでもかまわないと思っています。家族の病理とか家族システムの変化などという発想もしております。システム論的なBrief Therapyといえば一番近いでしょうか。そしてそのエッセンスはUtilization, Fit, Action, Parsimonious、多様な価値の尊重、普通の生活をゴールにすること。それと「ことば」の使い方。良くも悪くも「口先で治療しようというだけ」なわけです。
- 2 5 0 家族で治療する
- 2 5 1 IPの問題を解決するために家族を援助者にしてゆこうとする、或は家族の行動・態度を変えていくこと。
- 2 5 3 病気或は問題行動をきっかけにして個人の成長にとって基本的な役割を果たす家族相互の関係をあらためて見直し、そこから変化への糸口を探り出すこと。
- 2 5 5 うまくいかなかった過去にとらわれ、責任追求や罪障感にエネルギーを消費するのなく人の集団の生きしていく力に信頼する療法。
- 2 5 6 問題を抱えた本人、あるいは問題とされた本人と、その人の家族あるいは、それ以外の社会的環境との関わりの中から、問題の解決を見いだしていく心理療法である。
- 2 5 7 「個人療法」よりもより本質的な解決を図るものといえるかと思います。個人といえども必ずあるシステムの中で動いており規定されるからです(従って必ずしも「家族」でなくても良いわけで「機能不全が生じている場のシステムを変えることが本質的」ということになるのでしょうか。)
- 2 5 8 冒頭に述べられた定義に同感
- 2 5 9 家族内力動を最も明確に把握しえるもの、またその一部を修正することで、全体の変化を促進すること

が期待できるもの。

- 260 病理性を問題にせず関係性に注目する中に、人間に対する健全な信頼を置く治療法と考えています。
- 261 システム的な認識論に基づく治療法があると想定して、その中でとりあえず家族を「家族」としてくつてみて、治療対象とする治療法。逆に言えば上述の「システム的認識論に基づく治療法」が、一番有効性を発揮しやすいのが「家族」というシステムの区切り方あるいは「家族一治療者システム」という区切り方なのではないか、と考えています。
- 264 悪者を作らない
- 266 家族システムの機能の改善を図る療法
- 267 治療者の物の見方を変えること
- 268 家族というシステムに焦点を合わせた治療
- 269 知識（情報）の伝達。治療同盟を組むこと。
- 270 苦悩に対する共感であり、家族員一人一人に対する愛だと思います。従って、共感する能力、愛する能力を持つかいたいです。
- 271 子供の問題解決はどうしても家族、特に親の協力が必要であり、家族のDynamicsを変えることの力の大きさはいつも痛感します。最近は、両親の他に、直接、間接にIPに影響を及ぼしている祖父母（F方、M方共）の参加に大きな意味を見いだしています。
(付) 唯、常に思うことは、家族の参加を得られるだけのmotivationを家族がもてない家庭の問題……一般の来談家族はその方が多いので……に悩まされている現状です。
- 272 成員にとって公平である。家族が和を保ちながら個として独自性を尊重促進できるものと思われるが難しい。
- 273 特別に時間をとって家族IPと契約してやるにせよ日常の外来治療や、入院患者の診療をするにせよ、IPの問題を家族システムや学校システム等の中で、システム的にとらえて、対応することにあると考えています。
- 275 家族変化のプロセス、(成長の促進や膠着)を他の技法より早期に達成へ向かわせることができる。
- 276 より効果的治療処遇をめざして関心をよせています。これから学習していくこうと考えています。
- 277 過去にとらわれることなく現在の家族のありのままの姿から援助活動を始めることができる。しかも、より具体的な目標のため家族員に実現可能だという自信をもたせることができると主体性が生ずる。
- 280 当然、個人精神療法においても治療者に問われる治療者自身の価値観等（源家族との関係から来るものでしょうが）があり、きびしくチームによって、あるいは直接にくる家族によって、検討されるものだ、と思います。これまでの関係から家族も悪循環から変わっていくことにつながってくると考えています。
表面的な技法の華やかさが目立つようですが、個々人のありようがチームの中でさらけ出されることを考えば密室の個人精神治療法よりも治療者にとってはある意味で大変な治療法であると思います。
- 282 円環的思考ととした思考に立脚した介入
- 283 技法ではなくケース概念化のひとつのやり方
- 284 家族が家族員の成長を促進するように変化できるよう援助すること。
- 285 個人のもつ症状（問題）は、家族全体がうまく機能していないことを示しているので、家族全体の人間関係（構造）を変えようとするもの。
- 287 技法いかんにかかわらず家族というシステムに焦点をあわせた治療法である。
- 288 その治療構造の中で各自が力動的な変化に気づくこと
- 289 家族がより健康なレベルで機能できるよう、様々な技法を用いて家族システムに働きかける援助活動と受けとめております。（不勉強ながら）
- 291 一般システム論から（家族）を一つのシステムレベルと捉える視点にユニークさがある。従って（家族）のみにセラピーの視点が留まるときはおのずと限界がありすぎると考える。例えば、school refusal、職場のストレスの問題等々。
- 292 各々の家族の役割、機能をシステム理論に基づいて明らかにし、その中で現在問題になっている患者との関わりにおいて、どのような力動が働いているかをロールプレイ、家族なども参考にしながら、同時面接で話し合い、家族員に各々患者との人間関係の歪みに気づいてもらって、行動の変化をはかるも

- の、それを通して患者のたり方も次第に正常化してくるものと考えます。
- 294 私にとっては、家族療法と呼べるものではない。むしろ個人療法で限界を感じた時に、あるいは個人的にも家族のレベルで問題を取り上げたいと思った時に用いるひとつの面接形態である。今は、治療者のトレーニング場になり得るといえる。
- 295 治療や問題解決のために家族の力を利用させていただくこと。決して家族を患者扱いして家族全体を治療するなどと考えないこと。患者とみなすのはIPだけでよいと思う。
家族には治す力や解決の力があるのだと信じることから始めたい。
- 296 これまでの個人に対するアプローチが様々の流派・技法があったのと同様に、家族療法の場合も様々な流派があるのは当然のことで、どれか一つの立場が正しいと決められるものではない。また“家族療法”という呼び方が最も適当かどうか疑問はある。個人について、その内部システムからだけでなく、スーパープラシステムとの関連において、広い視点から理解すること。“セラピー”のみでなくケースワーク、カウンセリングなどのすべてに適用できるもの。結局のところ“家族療法”という何か特定のものがあるわけではなく、その人（専門家）のおかれている場と経験に応じたものになるのであろう。
- 298 家族の個々人に働きかけるのではなく、家族というシステムに働きかけるものである。従来から主流として行われてきた個人療法とはやり方が異なっている。
- 299 私は専門的知識は持っておりません。外来に出ていて患者さんからよく相談を受けるので、この会に入会させていただきました。そのためどこ迄答えてよいか分かりません。私の相談範囲は狭く、又、専門家ではないので。唯、家族関係が非常に重要なポイントである事を感じており、今後も時間の許す限り貴会で勉強させていただきたいと思って居ります。今後ともよろしくお願い申し上げます。
- 300 慣習化された人間関係から生み出される障害について気づき、自発的にその関係を変革し、障害を除去あるいは克服して、調和と解放（自由）ある人間関係を創造していく営みを援助する療法。
- 301 症状には対人関係の機能がある。
- 303 一般には家族を対象とすれば治療者の持つ理論的枠組みに關係なく、「家族療法」と呼ばれているし、それでよいと思う。つまり家族療法とは家族を治療の対象としたもの、それ以上でも以下でもないゆえに本調査の家族療法の定義づけは大変気にいっています。
- 304 「家族」の枠組みを意識的に創ること。
- 307 人間に対して肯定的。とらわれない自由
- 308 家族全体の力関係を（行動パターンを）意図的に短期的に（世代交代のように長期によるものでなく）変化させることにより、特定の成員に生じている行動上の問題を改善又は、解決していくこと。
- 309 家族としてのシステムの機能回復である。
- 310 発想の転換。円環的な家族関係の理解（まだまだ不勉強ですが……）が魅力的です。
- 312 家族間の言語的交流を促進し、問題解決能力を育てる。
- 313 家族成員の相互交流のあり方。機能不全のパターンや直面している問題を分析し、仮説をたて家族内の機能の可能性に働きかける療法である。
- 314 家族療法とはというより、私にとっては、システムックなアプローチは、問題解決のための“でっちあげ”にすぎないが、一つの手法として非常に便利である。ただし決して万能ではない。
- 315 ある問題を感じている成員とそれをとりまくシステムの両方に焦点をあて、その組織がより良いまたは彼らが望む方向に進めるよう手助けをする理論と技法である。
- 316 IPの年齢、疾患などによって家族療法の必要性、意味、効果等が相違すると思うが、一般にIPにとってのkey personへの接近は大切だと思う。
- 320 原因追求せずシステムを変化させることによって関係が変わる。家族間相互のコンサルテーションである。
- 324 プラス志向。原因追求、犯人探しよりも今、できることからの出発。
- 326 • 家族が問題であると思わせる場を設定して、家族には何も問題はないと示唆してみせる治療
• 問題を家族全体のせいにして症状をとる治療
- 328 従来の科学の分析、還元主義により生み出されてきた“部分”を統合し“関係”をその対象としようとする革命的な活動である。それゆえ、多くの混乱をもたらしている。家族療法的アプローチをはじめた諸機関、医療機関内の組織上の混乱ばかりでなく、最近の学会員にも、その混乱が見てとれる。「一つの技法」と捉えているところに、その混乱の源があると思われる。又、あらゆる立場、あらゆる個性が対

等に扱われねばならない筈なのに、学会内にも、"部分" 尊重(偏重)の動きがあるようと思えてならない。そういった"混乱"を目の当たりにするにつけ、「家族療法」のエッセンスが十分理解されていないことを痛感するし、おかげさまで、"関係"をとらえようとする私の目が肥えてきているようである。良き理解者を増やすためにもっと混乱していただきたいものである。

- 330 治療遊びとして捉え、治療チームと家族とのかけ合いで治療的変化を引き起こすもの。いわば"漫才"
331 家族員個々の病理を問題とするのではなく全体のシステムをながめ、関係の中でどこに問題があるのか、何が円滑な機能の障害となっているのかを発見し、それをとり除くことにより本来の家族がもつ健全性を發揮し家族全体が成長することへの援助であると考えます。
333 家族ごっこ
-

文 献

- 1) Maruyama, H., "The Second Cybanetics: Deviation-Amplifying Mutual Causal Process," American Scientist, 51, 164-179, 1963.
- 2) 清水新二・高梨薰・鈴木浩二:近年の家族療法の数量的諸特徴—家族療法全国実態調査結果を通して—. 精神保健研究. 37, 211-237, 1991.
- 3) 鈴木浩二・清水新二・高梨薰・坂上祐子・対馬節子・豊沢義紀:家族療法に関する全国実態調査報告(第1報). 家族療法研究. 8:2, 169-181, 1991.
- 4) 鈴木浩二・清水新二・高梨薰・坂上祐子・対馬節子・豊沢義紀:家族療法に関する全国実態調査報告(第2報). 家族療法研究. x:y, xx-y y, 1992.